巻頭言

労協新聞からひも解く「よい仕事」の原点

松沢 常夫（日本労協新聞編集長）

私が日本労協新聞（当初は「じぎょうだん」）の編集に携わってから25年経った。初期の紙面を振り返り、「よい仕事」について感じたことを書かせていただいた。（登場する方の肩書きは当時のもの）

涙しながら書いた

日本労働者協同組合連合会の母体である建設一般全日自労で機関紙「じかたび」の編集をしていた私が、労協連（当時は中高年雇用・福祉事業団全国協議会）に移ったのは1987年５月、宮城県松島で開かれた第８回総会からだ。

総会を報じた「じぎょうだん」６月15日号１面には総会全景ではなく、発言する「三人娘」の写真をやや大きく載せた。趣味的だったのかもしれないが、発言そのものに感動したからである。

このうち、西淀病院職員食堂事業所田辺美樹さんと、東京健生病院事業所田中羊子さんの発言は、「一歩一歩の『団づくり』が『良い仕事』に」という横一段の大見出しを掲げて紹介した。

「事業団らしい助け合いが　あったかさつちかう」という見出しの田中さんの記事は、「一昨年、大学を出て、昨年十月から東京健生病院の現場に。『生まれて初めて男性のトイレに入るときは緊張した』……ここで、団づくりをすすめてきた」というリード（前文）に続けて、「仕事を終えたおばさんが、足を引きずって帰っていく様子を見ていたおじさんが、翌朝一時間早く出てきて、『疲れてるようだったから、少しやっておいたよ』って、さらっと言うんです」「仕事をしたい人が来ると、休憩時間に団員みんなで面接するのですが、言葉が不自由なおじさんが『ここはいい人ばかりだから心配ないよ』って言ってくれた」「『もう治らない』と言う患者さんに、『そんなことないからがんばれよ』って清掃をやりながら励ましている」とあり、働く仲間同士の協同、利用者との協同の原点のような発言となっている。

田中さんは「この前、スポットの仕事（網戸清掃）も取れ、みんなのあったかい気持ちが、ようやくしっくりとまとまってきたところです」「賃金引き上げなどの目標に、みんなが一緒になって向かっていける団づくりをしていきたい」と締めくくっている。

田中さんは現在、労協連専務をつとめているが、彼女たちの発言を聞いた時も、原稿にまとめる際も、私は込み上げるものを

抑えることができなかった。「団づくり」という言葉で表現されている、一人ひとりが事業の主体者となる組織づくりの努力。大学を出たばかりの女性たちが、年配の仲間と格闘しながら、人間らしい職場文化を創造しよう、一緒に成長しようと、真摯に取り組んでいる、その姿。彼女たちの真っ直ぐな眼差しに心を打たれ、つい先日まで仕事をしていた建設一般全日自労本部の中での事業団批判(「低賃金労働者を拡大している」など)に影響を受けていた私自身が、情けなく、恥ずかしかった。

この号は、「固い」という批判も受けたが、長野事業団小沢房生さんらの「まちづくり」と結んだ「仕事おこし」の発言など、どれもが、失業をなくし、社会を自分たちの力で、より良くつくりあげていこうとする、チャレンジ精神にあふれたものだった。

事業団の仲間たちは、なぜ、こうも誇りと確信を持って働いているのか、生きているのか。そのことを含めて、私にとって、「よい仕事」を考える原点ともいえる新聞になった。

ところで私は、事業団が批判されていた点についても、正面から考える企画「ホンネ討論」を、後に組んだ。埼玉北部事業所委員の横倉しず代さん(現在、北関東事業本部事務局次長)がセンター事業団永戸専務に「あなたは現実を知らないでしょ」と迫る「事業団は本当にいいところか」(89・5・15号)と、船橋地域事業団(現在、ワーカーズコープちば)の3人の団員と古村伸宏事務局長(現在、労協連専務)による「事業団の『低賃金』だれがどうすれば上げられるか」(89・7・15号)の議論だ。

前者は、特別に企画したものではなく、打ち合わせの後、何人かで飲んだ席でのやりあいを記録したものだが、どちらも2面分を使い、2回目では、「こんな議論がやれるのも事業団ならではと胸が熱くなる。賃金は経営の根本問題の一つ。みんなで改善策を。主人公になるのは大変だが、やりがいがあることだ」と、あとがきに記した。

「捨てるゴミの向こう」

次の7月1日号では、労協運動の質を変える一つの力になったと評価される連載企画「捨てるゴミの向こう」が始まっている。当時は、本部勤務の事務局員も本部事務所があった病院の清掃の仕事をしていた。その一人、田中夏子さん(現在、都留文科大学教授)が院長室のゴミを収集していた際、指にケガをした。「燃えるゴミ」のカンに、瀬戸物の破片がむき出しで捨ててあったのだ。話を聞き、「それ、書いてよ」と頼んだのだが、もらった原稿には、「相手の姿が見えないと、人間って無責任になるようだ。もっとアピールしたい。『捨てるゴミの向こうにも人がいる…』ってことを」とあった。

「捨てるゴミの向こう」という言葉は、その数年前に聞いた「次工程は仲間だ」という、沖電気の指名解雇と闘う人たちの言葉と重なって響いた。「沖電気の標語の一つに『次工程はお客様』とあるが、次工程はやっぱり仲間だ。私の後に作業する仲間がやりやすく、よい仕事ができるようにする。その仲

間を分断して良い製品ができるのか」と。

それはさておき、私は、この投稿を「東京・NT」の名で、1面左肩に7段とって載せた。

直後、私は、4月から事業団の現場になった栃木珪肺労災病院現場の「結団式」を取材に行った。すると、「捨てるゴミの向こう」の記事が大きな話題になっていた。注射針や試験管などがビニール袋に捨てられていることもあり、腕や指をケガした。何回も病院に申し入れ、カンに詰めるなど改善されてきたが、まだ不十分で、集めた針を町の焼却場に持っていこうとしたら、作業員が危険だからと断られた。そして、団員たちはこう言った。

「私が前にいた病院では、業者がゴミを持っていってくれたから、その後どうなるかなんて考えたことはなかった」「看護婦さんもお医者さんも、危険な、忙しい仕事をしていると思うけど、針だけはきちんとしてほしい。“捨てるゴミの向こうにも人がいる、そのまた向こうにも人がいる”ってことを考えてやっていきたい」

この話は、針を刺した2人の写真とともに、「連続追及　捨てるゴミの向こう」「そのまた向こうに人がいる」という見出しで掲載した。

「その向こう」ではなく「その前」にも思いを馳せた記事がある。病院の洗面所の流しにカミソリが捨ててある。だらしのない、どうしようもない患者さんだと思っていた。しかし、ハッと思って、ビンを用意し、カミソリを入れて置いたら、次の日、もう一本入っていた。「その前」の人を批判して終わっていた自分を反省し、「嬉しかった。捨てるところをきちんとすれば、もっと協力してもらえるのでは」と団員(87・9・1号)。ものの見方、人の見方が180度変わったのだ。

私は、事業所長会議などでも発言させてもらいながら、看護師さんとの話し合いや処理方法の提案など、各病院現場での改善の取り組みを記事にし、連合会中田宗一郎事務局次長らと厚生省も訪問(厚生省も、院内感染防止、医療廃棄物処理対策に乗り出していた)、さらに、「注射針による事故を防ぐための紙上アンケート」を行った。これには、事業団が常時清掃をしている42病院・診療所中、40病院・診療所の223人が1週間で回答を寄せてくれ、半数が「刺した」ことがあると判明。また、針刺しは「ゴミ出し中」が8割を占め、対策を立てる上でも役立った(87・11・15号)。また、この結果が毎日新聞などで報じられたこともあり、日本環境感染学会総会で発言する機会も得た。

この取り組みは、「きれいで安全で心のこもった病院作りへ　協同の輝き」というタイトルを付けた、東京健生病院の総婦長、事務長、労組委員長と清掃団員全員による話し合い(88・1・1号)に典型的だが、病院清掃という仕事を、安心・安全・清潔な病院をつくる、誇りある仕事としていくうえで大きな役割を果たした。そして、「『捨てるゴミの向こう』の提起で何が変わったか」と題した「中間総括」の座談会を、たしか東京で開いた事業所長会議の夜、宿舎の部屋の床に座り込むようにして行い、3面分使って掲載した(88・9・15号)。

ところで、先の投稿の書き出しは、「病院内の一人現場でゴミを取る……たったこれだけのことだけれど、いろいろな発見がある」というものだ。原文には、この後、発見の例がいくつか書いてあったように思う。「捨てるゴミの向こう」のテーマに絞ってしまったが、「発見」や「学び」を追求しきれなかったのは反省点だ。

改めて「よい仕事」を問う

連合会とセンター事業団は1989年5月19、20日に、第１回「よい仕事研究交流集会」を開き、６～７月を「よい仕事・団づくり全国交流月間」に設定、各地の経験を学び合うようにした。

新聞では、１月のセンター事業団事業所長会議の永戸専務「まとめ」の中での、この集会への提起を載せ、３月の連合会理事会での中西五洲理事長、黒川俊雄理事（慶応大学教授）、永戸事務局長の発言を、「なぜ『良い仕事』か」のタイトルで紹介した(89・3・15号)。

中西理事長は、単純化していうが、と前置きし、「儲け本意の利潤企業は国民のためのよい仕事ができなくなっている」と話し、「『労働者が主人公』『よい仕事』『徹底民主主義』が相互に結びついたキーワードだ」と提起。永戸専務も「この社会が発展するのは、仕事、労働を通じてである」「労働者にとって、まともに仕事をしたい、出来映えをよくしたい、というのは本源的な要求だ。しかし、資本家にとっては、『儲けるための手段』であり、労働者の方も歪んだところでは『稼ぐための手段』でしかない」「仕事や労働に対する労働者の主体性－自分はこの仕事にどう関わり、どう考え、どうするのか－を考えるようにならなかったら、労働者が主人公になるということはありえない」と主張。そして、黒川教授は、「情熱を持って、ある協同組合に入ろうとしたゼミ生が、人事の人に『よい仕事』のような話をしたら、『そんな夢みたいなこと言って入ってくるな』といわれ、ガックリきて普通の会社に入ってしまった」という例を紹介、「こんな状況があるだけに、『よい仕事』の提起は重要」と述べている。

そういえば、20年以上も前のことだが、労協への委託を検討中の、ある生協の物流現場を取材した時、案内してくれた生協職員が「ラインに並ぶパートの女性たちがおしゃべりばかりして、ミスも多い。そこで、仲の悪い人を隣同士にした」と説明してくれた。苦労を伝えたかったのだろうが、こういう「解決策」しか思いつかない職場とは何なのか。

「遠くにある原発」「無人機による空爆」など、自らは“安全”との幻想をもたされ、人の苦しみにも痛みにも無感覚になる世界が広がっている。それだけに、「捨てるゴミの向こうにも人がいる」の提起は、今の時代にこそ、振り返られるべきテーマだろう。

今、よい仕事は、社会連帯経営による仕事おこしの水準を切り拓き、FEC自給圏、総合福祉拠点づくりなど地域丸ごとの再生に挑戦する段階を迎えているが、「よい仕事」の歴史から学び、その意義を問うことの大切さを改めて思う。